今にして思えば、私は母の胎内におる時から、更にいえば、遥かの昔から、仏様に念じられておったのです。（『大石法夫先生直筆書信集』上二〇九頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』二〇四頁）

平成二十四年七月例会記録（第十九信輪読）

（二〇一二年七月二十五日実施）

# 「わが師、わが母」

【発題】心光寺住職　宮岳文隆（みやおかぶんりゅう）（釈文龍）

## ■この世のこととは思えない

今日は皆様、本当に遠い所をお参り下さいまして有難うございます。今、お一人おひとりの感話を聞き入るように聞かせていただきました。感話を聞かせていただくだけで聞法会を開いている意義があるということをつくづく感じます。

「心光寺定例聞法会だより・第1号」を一ヶ月前にお送りした時に「お返事は負担をおかけするのでご遠慮下さい」と書いたのですが、それでもいろいろな方からご返事をいただきました。それを読ませていただいて、改めて安藤さんがテープを起して下さったご苦労のお陰を感じました。そういうかたちで聞かせて貰いなさいというご催促だと思い直して発行することにしたわけですが、まさにその通りだったということを感じます。いろんな反応がありました。そのことが私にとっての聞法です。お一人おひとりの思わぬかたちでの受け止めに接して、私自身がまた新しく聞かせていただく。そういうご催促でした。発行していなかったら決して聞くことができなか

った声にも接することができました。そういうことを通して大きな教えをいただいています。

さて今日は第十九信「母の便り、師のお心」を輪読しました。樹心社から出版された際は「わが師、わが母」という題名に変えられています。平成二年、今から二十二年前に書かれた書信です。この第十九信も深い書信で、多くのことを感じさせていただいています。十分には触れることはできませんが、ご一緒に尋ねていきたいと思います。

まず二〇七頁五行目ですが、ここはAさんが読みながら、つい声が詰まって涙が出そうになったところですね

「奥さん。よう、大石さんを産んでくれましたのう」お師匠様が母の前で畳に手をつかれました。母も畳に手をつきます。「法夫が大変お世話になります」あとはお念仏。

私は目の前のこの光景が、この世のこととは思えない気持ちでした。世間から申しましたら、私はお師匠様にとっては他人の子です。その他人の子である私のことを「よう産んでくれましたのう」と私の母に手をつかされる。

（『直筆書信集』上巻二〇七頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』二〇一頁）

先生はちょっと下がった所からこの光景を見ておられるわけです。「私は目の前のこの光景がこの世のこととは思えない気持ちでした」。この一言が非常に心に残ります。ここの所が今日始めて読まれたAさんの胸にぐっときたわけですね。

お母さんは後に、この時のことに触れたお手紙を大石先生に書かれました。お母さん九十九歳の時です。それを大石先生は第十九信に取り上げられているわけです。その中でお母さんは、「本当に藤解和上様は如来様の顕現でございました」と書いておられます。このことについて先生は、「これは母の肚からの言葉です」と書いておられます。先生はお母さんがこう書かれたその背景にどんなことがあったかということを思い出しながら、このように書いておられるのですね。「その裏に私が寺を去ってゆく姿が見えたのでしょう」と。それで大石先生は二十五年前のその時の出来事を思い出されて、「この手紙をよむと、私とて泣けてきます」と書いておられます。

このことについては、前回輪読した第十八信「出家遊戯」の中に詳しく書いておられます。先生が一番苦しかった四十三歳の時のことです。二十六歳の時に大きな志を抱いて藤解先生の門下に入られましたが、それから十七年経っても道が開かれずに、行き詰ってとうとう寺を出て行かれたのです。お母さんが先生に会うのを楽しみに三日間の法座を聞きに来られることが分かっていながら、厳寒の二月の朝、何も持たず作業着一つで地蔵院へ出かけて行かれたのです。

「お師匠様、これから地蔵院へ行かせて下さい」。（中略）

「今日から法座が始まるというのにか」。「そうです」。「よろしい」。唯お一言でした。

（『直筆書信集』上巻一九九～二〇〇頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』一九一～一九二頁）

こうして先生は途中野宿しながら寒中の国道二号線を東に向かって歩いて行かれたのです。お母さんは三日間先生の家に滞在されましたが、黙して語らず。お母さんも辛かったわけですね。「その裏に私が寺を去ってゆく姿が見えたのでしょう」と書かれているのは、その時のことを踏まえているわけですね。

「本当に藤解和上様は如来様の顕現でございました」とあるのは肚からの言葉です。その裏に私が寺を去ってゆく姿が見えたのでしょう。「その時の事が目前に浮かび」あるいは「又御許もようこそ、ようこそ辛抱できた事と、之もまた私を救う為に如来様が、私の胎を借りてお出ましになられたと思わずにはおれません」と仏恩を喜んでくれます。

（『直筆書信集』上巻二〇七頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』二〇二頁）

お母さんは大石先生の長かった苦節の時代を思い出しておられるのです。その辛さがお母さんには誰よりもよく分かるのです。「御許もようこそ、ようこそ辛抱できた事と、之もまた私を救う為に如来様が、私の胎を借りてお出ましになられたと思わずにはおれません」。自分の子供のことをこのようにおっしゃる。これもまたお母さんの肚からのお言葉だろうと思います。

で、次の二〇八頁の冒頭に、

昔、私が中学校四年生の時「私の産んだ子が僧侶になって、私を救うて欲しい」と母が申したことを、以前この文信で書きました。

（『直筆書信集』上巻二〇八頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』二〇二頁）

と。その頃お母さんは苦しかったんですね。ご主人との間にいろんな問題があった。お母さん自身宿業の苦しみに喘いでおられたのです。その宿業の苦しみからの救いを自分の息子に託する思いで、「あんた坊さんにならんね」と言われた。そのお母さんの願いを受けて、後に大石先生はお坊さんになられたわけです。しかしながらおいそれとは道は開けなかった。大石先生が漸く光に出遇われたのは、入門してから実に三十八年経った六十四歳の時です。その時お母さんは九十四歳になっていました。

私が今もって本願が信じられず、迷い続けておったら、母はこんな手紙を書きません。そういうことから申しますと、救うて欲しいという母の願いは人間以上の大きな願い

から働きかけられておったのだと信じられますし、私が今日あるのも、生まれる前から、かけられていた御本願のおかげと信じられます。

（『直筆書信集』上巻二〇八頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』二〇二頁）

こういう一連の文章ですね。先ほどの先生のお言葉に「この世のこととは思えない」というお言葉がありましたが、ここにもそういう感覚が流れています。この感覚は大石先生の書信全体に一貫して流れている底流のようなものではないかと私は感じています。

## ■今生の関心に終始する時代

「この世のこととは思えない」。現代という時代は、こういう感覚はほとんど失われているのではないでしょうか。この世をいかに有意義に生きるか。これが現代人の関心の中心をなしているものだろうと思います。いわゆるヒューマニズムです。人間中心主義、現世中心主義。人間は死んだら終わり、生きている内が花。生まれてから死ぬまでの間をいかに有意義に生きるか。ほとんどその関心に終始しています。学問や芸術、哲学、文学など、高度な文明、文化も、根はみな同じです。それを仏法では三界と押えています。「流転三界中」。レベルの違いはあってもみな三界の中を流転しているのだと。三界とは「欲界」「色界」「無色界」。「欲界」とは五欲の満足を追求する世界です。「色界」は客観的な物質世界の真理を追究する世界です。科学者や天文学者が莫大なお金を投じて、国際協力をしながら重力の元になるヒッグス粒子の研究をしていると言います。そういうものも全て色界に入ります。そこには物質界を成り立たせている真理を追求する喜びがあります。「無色界」は精神的世界を追求する世界です。芸術、哲学、思想、宗教などがそれに入ります。そこには非常に高度な精神的な喜びがあります。

そういう違いはありますが、いずれも生まれてから死ぬまでの間、この世をいかに有意義に生きるか。その関心を出ないのが三界だと押さえられています。そしてその根柢には、我々の生は無から偶然生まれて、また無に戻っていくあぶくのようなもので、元々意味など存在しないのだという物質的、虚無的な人生観が、無意識の内に横たわっていると思います。

曇鸞大師は楽について、

楽に三種あり。一つには外楽、謂わく五識所生の楽なり。二つには内楽、謂わく初禅・二禅・三禅の意識所生の楽なり。三つには法楽楽、謂わく智慧所生の楽なり。この智慧所生の楽は、仏の功徳を愛するより起れり。

（真宗大谷派発行『真宗聖典』二九五頁）

このように押えておられます。これからすると、「欲界」は「五識所生の楽」、すなわち五感の快楽を追う「外楽」の世界とい

うことになります。また「色界」と「無色界」は「意識所生の楽」を追う「内楽」の世界ということになります。「意識所生の楽」はどんなに深くてもその人だけの個人的世界です。「凄いなあ」と感嘆はしても私らとは関係ない。

それに対して、三界を超えた楽は「法楽楽」ということになります。「法楽楽」とは「法を喜ぶ楽」、すなわち信心の楽のことです。それを「智慧所生の楽」と押えてくださっています。「智慧所生の楽」とは、阿弥陀仏の智慧によって始めて見出されるところの、無始以来の歴史と無尽の未来を持った「われらの身」の深さ―を尋ねていく喜びのことではないかと思います。「われらの身」ですから、その人だけの個人的世界ではなく、どんな人もその身の中に、それを持っていない人はいない世界です。

その世界は時計の時間を超えています。『無量寿経』に「道に昇るに窮極無し」（『真宗聖典』五七頁）と言われているように、死によって終わらない、無窮の歩みの世界です。ですからその世界は、めいめい生れてから死ぬまでの間を目いっぱい有意義に生きてそれで終わり、という個人的な人生観を超えています。それを「この世のこととは思えない」という言葉で表現しておられるのだと思います。

## ■生まれる以前から抱えている問題

この間日記を見直しておりましたところ、平成十八年十二月に大石先生が心光寺定例聞法会にみえられた時のことを書いてありました。ちょうどその頃坊守が非常に行き詰って、心光寺を出て行くというところまで追い詰められていました。その時大石先生は法話の中で、「信さんが泣き崩れて行き詰った。しかしそれは今度の事だけが原因ではありません」と話されました。坊守は直接的にはある方の度々の電話で行き詰ったわけですが、そのことだけが原因ではないとおっしゃったんですね。根はもっと深いのだと。結婚してからの二十数年間の問題が積もり積もってそうなったのだと。しかしそれだけではない。結婚する以前から抱えてきた問題もある。更に言えば生まれる以前、両親や祖父母が抱えていた問題、遡ればそういうところから持ち越してきた問題の結果なのだと。更に遡れば、善導大師が「曠劫来流転」と言われているように、無始以来迷いを重ねて流転してきた歴史がそこにはあるのだと。そういう根の深い問題が背景にあって、この度ある人の度重なる嫌がらせの電話が一つの引き金となり、行き詰って、にっちもさっちも行かぬようになったのだと。先生はそう言われました。

それは坊守についてだけ言っておられるのではないのです。皆さん方の中で今起こっている問題は、一人ひとり具体的でみな違いますけれども、先生は同じことなのだと言われるわけです。みな同じように根が深い。生まれる以前からの無始以

来の歴史を抱えている。元を辿ればみなそこから出ているのだと。

だから先生がここに書いておられること—すなわち藤解先生が手をつかれた、お母さんも手をつかれた、先生が行き詰って寺を出て行かれた、それを思い出しながら九十九歳のお母さんが先生に手紙を書かれた—そういうことの全てが「この世のことだけではない」のです。奥が深いのです。そういう所が私どもに響いてくるわけですね。なぜ響くのかといったら、我々も皆そういう根の深い問題を持っているからです。だから響いてくるのです。ですから決して個人的なことではないですね。

## ■この人には宿善がある

坊守について言うと、最初に坊守が大分県宇佐市の勝福寺さんの寺で大石先生に出会った時、泣きながら感話をした。坊守はその当時いろいろ問題を抱えていたわけです。私との夫婦間の問題もあるし、義父（私の父親）との問題や子供やご門徒さんとの問題等を抱えていた。そういうことを話したと思うんです。ところがそれを聞かれた大石先生は、「あっ、この人は宿善がある」と、そう思われたということを後になって言われました。そのことを聞かれたある同行さんが、坊守に対して「あんた誉められていると思ったのか」と言われたそうです。しかし坊守にしてみれば、誉められているという感覚ではなかったわけです。けれどもけなされているという感覚でもなかったと言っています。つまり先生は、誉めて「あなたは宿善がある」と言われたわけではないんですね。先生が「宿善がある」と思われたのは、言葉を変えれば「業が深い、問題が深い」ということなのです。沢山問題を抱えてにっちもさっちも行かぬようになっている。そういうふうに身動きできない状況になっている姿を見られて、「宿善がある」と感じられたのですね。だからこれは決して何か個人的なことを誉めて言われた言葉ではない。問題が多いということが、実は宿善があるということなのです。そこがみんなに共通してくるわけです。「この人は宿善がある、あの人はない」と、そんな個人的なことを言われたのではありません。それでしたら単なる評価付けですね。そんなことではありません。

どの人も問題がない人はいない。でも問題があるということが実は尊いのです。先生ご自身も随分と問題を抱えて悩まれた。その果てに、そんな自分を、「尊い」と手を合わせてじっと待っていて下さる声に出会われたのです。ですから同じく問題を持っている人を見て、「この人も仏様が手を合わせて呼んでおられる尊い人だ。そういう宿善がある人だ」と思われたのでしょう。そのことが私にはとても印象深く心に残っているんですね。

宿善の「宿」とは、「はるかな昔からこの身の奥に宿してき

たもの」ということです。それから「善」とは、求める心、仏様に出会いたい心、本願に出会いたい心、自己の尊さに出会いたい心のことです。そういう心は、私どもの意識の中にあるのではありません。意識の中にではなくて、「この身」の深いところに、誰の中にもあるのです。ですから意識の上で「自分はこんなに真剣に求めている」と思っていても、それは宿善とは言わないのです。今のところそういう気持ちになっているというだけのことです。そういうものは個人的な心ですね。「あの人は凄い」と皆の憧憬の対象になることはあっても、他の人には通じないですね。

大石先生はそういう心を見ておられるわけではないのです。「宿善がある」というのは「業が深い」ということです。その深い業の中に求める心があるわけです、ですから個人の意識で「私は求める心があります」というようなものとは全然違います。業の中に求める心があるということを別な言い方をすれば、自分が求めるのではなくて、仏様の方がそういう人を求めているということです。仏様が会いたいのは、救われた人ではなくて、業に喘(あえ)いでいる人です。仏様にも色々ありますけれども、特に阿弥陀如来という仏様はそういう仏様です。何とか自分でやっていける人は、別に阿弥陀さんでなくてもよいわけです。だけども業が深くて喘(あえ)いで何ともならんという人は、もう阿弥陀さんでなければならないし、また阿弥陀さんもそういう人を欲している。阿弥陀さんはそういう人に会いたいのです。

今日はそこまで触れることはできませんが、これは「唯除(ゆいじょ)の問題」（「心光寺定例聞法会便り・第3号」十一～十四頁参照）に関わっている所です。業が深くて喘(あえ)いでいる人は、意識の上では別に法蔵(ほうぞう)菩薩(ぼさつ)の本願に会いたいとは思っていなくても、その業自体は法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)の本願に会いたがっているのです。また法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)の本願も、業が深い人に会いたがっているのです。つまり両者は引力のようにお互いに引き合ってるわけです。意識はどんなに逃げていても、業自体は法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)の本願に会わなかったらどうにもならないものを持っているのです。そういうものを宿業と言います。

先ほどから申しておりますように、宿業の中に抱えている問題は、生まれてからだけのものではありません。無始以来の無数のご先祖の問題を抱えています。そういう多くの人たちの喘(あえ)ぎや苦しみが今の私となっているわけです。この私の身の中には、無数のご先祖の喘(あえ)ぎや苦しみ、また解決できずに持ち越してきた様々な問題がいっぱい詰まってるのです。ですから宿業の前では、小手先の勉強や自分持ちの信心ではどうにもならないのです。

## ■宿業の身と南無阿弥陀仏

前回輪読した第十八信は、平成元年大晦日の朝日新聞の社

説に取り上げられた井上靖氏の文章から始まってます。「人間は大きい天の摂理の中に自分を投げ込み、成敗は天に任せ、その上で己が信じた道を歩くほかありません。これが乱世にても、人間のただ一つの生き方だと孔子は説いた」（趣意）。井上靖氏は孔子の言葉を取り上げてこのように自説を展開しています。しかし人生にはこのような井上靖氏の教えではどうにもならない問題があります。先ほどの感話の中でも、ある具体的な問題が出されて、こういう悩みの中では孔子が言われた「一切を天命に投げ入れて」という教えではどうにもならないという話が出ていました。

こういう業の問題の前では、生まれてから死ぬまでをいかに有意義に生きるかというヒューマニズムの教えでは、根本的な満足は得られないでしょう。法蔵菩薩の本願に会わないことにはどうにもならない根深さを持ってます。また法蔵菩薩も宿業に苦しむ人に会いたいのです。なぜなら宿業の問題を前にしては、蓮如上人が『御文』の中で「三世の諸仏にすてられたる、あさましきわれら凡夫女人」（『真宗聖典』七九五頁）と言われているように、三世の諸仏も「手がつけられない」と言って逃げていくからです。仏様が逃げていくほどですから、神様も、ましてや世間の人たちも逃げていきます。法蔵菩薩以外は全部逃げていきます。宿業に苦しむ人に本気で向き合うのは、法蔵菩薩の本願だけなのです。

三世の諸仏から見込みがあると思われている人は、三世の諸仏に救われていけばよいわけです。三世の諸仏から見放されている人は、法蔵菩薩しか相手にしてくれる仏様がいないわけですし、また法蔵菩薩もそういう人にこそ会いたいのです。法蔵菩薩の本願に会わなくても何とかなる人には、極論すれば、法蔵菩薩も本当は会わなくてもよいと思っているのではないかと思います。南無阿弥陀仏でないと救われない人にこそ、南無阿弥陀仏は会いたいはずです。倫理道徳とか、仏教のいろんな教えを聞いて満足してる人は、もう南無阿弥陀仏は要らんわけですから。

でも本当はどんな人も、そうじゃないんですよ。意識の上では自分の力で何とかなると思っている人だって、身は南無阿弥陀仏に会わない限りどうにもならない宿業を抱えているのです。南無阿弥陀仏は、万人がそれを生きているところの宿業の身を呼んでいる。またわれらの身も、南無阿弥陀仏を親のように求めている。そういう意味では、両者は深い所で引力のように引き合っています。そういうことがずーっとこの文章の中に流れているものだと思いますね。

## ■どうにもならない業が縁となって

大石先生自身は非常に育ちも良くて、エリートの道を歩んでこられた。そういう大石先生ですから、ヒューマニズムの世界だけで満足できておれば、仏法に遇うことはなかったでし

よう。

私が生まれながらに、人間として鷹揚で従順で、仏様の教えが素直に信じられる性質の者だったら今日はありません。

（『直筆書信集』上巻二〇八頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』二〇二頁）

こう書いておられます。「鷹揚」の意味を辞書で調べたら「育ちが良くて、人を疑ったり負けないぞという勝気な気持ちが少ない性格」というようなことを書いています。育ちがよいから露骨な競争心もあまり必要ない。厳しい中だったらそういうものが鍛えられていきますけれども。藤解先生も言われていますが、大石先生は世間的には好青年ということで通るわけです。友達もそういうふうに見ています。財産家の子に生まれて性格も成績も良くてと。世間的には大石先生はそういう境遇の中に育ったんですね。

けれども先生自身においては、「私が生まれながらに、人間として鷹揚で従順で、仏様の教えが素直に信じられる性質の者だったら今日はありません」と書いておられます。表面はそのように見えていても、奥を探ってゆくと、誰も皆どうにもならない業を持っているんです。先生もやはりそういう業があったんですね。先ずは御両親の業、特にお母さんの業が影響したと思われますね。

先生からお聞きしたところでは、お母さんは色々なことで非常に苦しまれた方ですね。望まぬ結婚だったようです。結婚式前夜はお通夜みたいだったと先生は話しておられました。結婚式というと目出度いのが普通ですが、お母さんにとっては必ずしもそうではなかったようです。結婚してからはご主人から殴られることもありました。他にもご次男を戦争で喪われたり、家を継がれたご長男との問題等、色々な苦しみがあったそうです。母親の苦しみというものは、感受性の強い子供には、言葉では言わなくても伝染するものです。大石先生は鋭敏で感受性が強かったから、無意識のうちにお母さんの苦しみをご自身の問題として背負っていかれたのではないでしょうか。特攻兵器「回天」の搭乗員だったということは、死に直面したということです。復員して大学に戻り、婚約もされ、就職も決まっていたわけですが、それでは満足できないものを感じて仏門に入られた。その背景には、お母さんの苦しみの課題というものがやはり無意識の内に影響していたと思います。

そういうものは本当は誰もが皆持っているんですね。持っていない人はいない。だけど実際に表に現れる例はやはり限られています。特攻隊員になった人は何万人もいると思いますが、そのことがご縁となって仏門に入った人は果して何人いるでしょうか。同じ出来事に出遭っても、この身が持っている求道心が必ずしも噴出するとは限りません。

大石先生の場合はそれが噴き出して仏門に入られたわけです。けれども、道は容易には開けなかった。道が開けるまでの道のりは半端なものではありませんでした。二十六歳で入門して、二十年近くたっても道が開けるどころか挫折して、四十三歳の時に一時寺を出ていかれました。ようやく光に遇われたのは、師がすでに亡くなった後で、六十四歳の時でした。入門から実に三十八年かかっています。某先生は「仏法が分かるのにそんなにかからんといけんのか」と言われたと人づてに聞きました。何か軽蔑したような言い方をされたそうです。でも私どもに大石先生が響くのは、実はそこなのです。すーっと一年や二年で分った方にはあまり惹(ひ)かれないでしょう。

Bさんも先ほど話しておられましたが、我々はあっちにぶつかりこっちにぶつかりしながら、やっと歩んでいるわけです。そういう我々にとっては、すーっと分った先生には近寄れないですよね。でも大石先生はそうではなかった。喘(あえ)いで行き詰った果てに、ようやくそういう自分を呼んでいる声に出遇われたのです。そういうところが我々に響くんですね。

## ■宿業と本願の深い因縁

大石先生が「この世のこととは思えない」と言われた、その感覚が表れている所がもう一箇所あります。

今にして思えば、私は母の胎内におる時から、更に言えば、遥かの昔から、仏様に念じられておったのです。御師匠様に遇わせて頂いてそれを教えて頂いたのです。

（『直筆書信集』上巻二〇九頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』二〇四頁）

ここですね。こういう感覚ですね。私どもが仏法を求めるというのは、この世だけのことではないという感覚ですね。合理的な考え方からすれば荒唐無稽に思われるかもしれません。でもこういう言葉やお話を聞いた時に、皆さん方の中に、確かにそうだと頷くものもやはりどこかにあるんじゃないかと思うんですね。皆さん方にしても、求め始めたのはこういう具体的な問題があったからだとか、そういうふうに一応説明はできても、やはりそれだけでは説明がつかないものがあるんじゃないかと思います。それを「母の胎内に居る時から、更に言えばはるか昔から仏様に念じられておった」と表現しているのです。要するにこの身は仏様から念じられている身だということです。意識ではなくて、「この身が」です。

大石先生はそういうふうに本当に苦しんで出遇われた。それが私どもに響くというのは、大石先生の個人的なものが響くのではないのです。大石先生の苦しみは個人的なものではなく、宿業の苦しみです。宿業は個人的なものではありませんね。私どもみんなが共通してこの身の中に持っているものです。大石先生は宿業の苦しみを通して本願に出遇われたのです。

本願と宿業というのはものすごく深い因縁があります。覚如上人が『執持鈔（しゅうじしょう）』に、「本願や行者、行者や本願」（『真宗聖典』六四六頁）と書いておられますが、この「行者」とは、「宿業の身を生きる者」と言ってもよいでしょう。従って覚如上人のこの言葉は、「本願や宿業、宿業や本願」と、こういうふうに言い換えることもできるでしょう。本願と言ったら宿業、宿業といったら本願。両者は切っても切り離せない深い関係にあって、お互いに引き合っているのです。

大石先生が宿業を通して本願に出遇われ、その本願が今度は大石先生を通して私どもの宿業へ響いてくるのです。そういう関係があります。そういう意味で個人的なことではないわけです。何か大石先生が特別に偉くて素晴らしい境地を得て、それを我々は憧れているということなら、全く個人的な世界の話になってしまいます。大石先生が個人的に得たものが私どもに響いてくるのではありません。大石先生が業の苦しみを通して出遇われた本願が、今度は先生を通して私どもの業に響いてくるのです。この第十九信だけではなくて、先生が書かれた百信の書信に書かれている出来事の全てがそういうことなのです。私どもに無関係な個人的な出来事ではなくて、全部私どもに関係がある出来事なのです。

今皆さん方が感話でいろいろな問題を話されましたが、問題を抱えているからこそ、皆さん方もこの書信の中に響くものを感じるのではないでしょうか。私どもは皆共に宿業に苦しむ者として本願に呼ばれている存在なのです。

## ■孤立感の中で

Cさんが感話の中で、お葬式にお参りした時ある方に声を掛けなかった。そのことに心の痛みを感じているというお話をされました。人間としての自然な心の交流を失って、いつの間にか一つの立場に立って相手に接してしまう自分に寂しさを感じるというお話でした。私自身もそういうことを感じることがあるので共感を覚えました。この間行われた大分組夏期講習会の時でもそのようなことを感じました。

また最近ある方からこんな手紙を頂きました。今年五月の心光寺定例聞法会において、私は新幹線の中で孤独を感じたことを話しています。（「心光寺定例聞法会便り・第6号」所収）それをその方がCDで聞かれて書いて下さったお手紙です。全部は読めませんけれども一部を読んでみます。

お忙しい日々の中で第十七信の輪読会（二〇一二年五月心光寺定例聞法会）のCDをお送り下さいまして誠に有難うございました。（中略）これを聞かせて頂く前の一ケ月は、何もないのに自分が感じた圧迫感がストレスになり、鬱状態でした。

十七信のところ改めて聞かせて頂いたら、初めの方で宮岳様が新幹線の中で孤独を感じていた…というお話に

共感して、十六信（二〇一二年四月心光寺定例聞法会）、十五信（二〇一二年三月心光寺定例聞法会）、十三信（二〇一二年二月心光寺定例聞法会）、十二信（二〇一二年一月心光寺定例聞法会）まで遡って聞き直していました。（中略）私の鬱もどこかに飛んでいって消えてしまっておりました。（中略）私は読んでも読めない、聞いても聞こえない自分だなあと思いました。（後略）

（平成二十四年七月十九日付）

このお手紙に私も共感するところがありまして、まだ返事を書いてませんけれど、途中まで書いているものをちょっと読んでみます。

お便り有難うございました。新幹線の中での孤独に共感されたという所と、それから「私は読んでも読めない、聞いても聞こえない自分だなあと思いました」と書いておられた所、私にも何か響くものを感じました。

去る七月二十一日、隣寺の前坊守様の御葬儀があり、私が導師を勤めさせていただきました。二十日夜御通夜が行われました。教区内の住職方や坊守さん達、御門徒の方々等々沢山の方々がお参り下さっていました。その御通夜の席の法話で、大勢の方々を前にして、私の頭の中は途中で真っ白になり、立ち往生し、話は全く宙に浮いてしまいました。その時の孤立感を一体どう表現したらよいでしょう。

その日の夜は様々な思いが横切って寝苦しい夜でした。翌朝目覚めて思いました。多くの人々の真っただ中で私の掛け値のない姿が晒（さら）されたのはよいことだった。本願の私を呼ぶ声は、有頂天の中では決して聞こえてこない。世界中の人が逃げて行く、自分も逃げて行くような、世界全体から拒絶され、荒野の中にただ一人投げ出されたような孤立感の中でこそ、始めて聞こえてくる。このことが静かに身に落ちてまいりました。

（平成二十四年七月二十六日付）

皆さん方はよく聞いておられると思いますが、藤解（とうげ）先生にこんな言葉があるんですよ。

「わしはあんたの友達じゃという人がおったら、あんたはわしの本当の姿を知らんからそう言うんじゃ。そういうあんたもわしの本当の姿を知ったら逃げるぞ。そう言うて出れるものを貰っておきなさい」

このように藤解（とうげ）先生はよく言っておられたそうです。私どもは「私はあんたのことはよく分かってるよ、友達だもの」と、言われたら、その人にすぐ飛びつきますよね。孤独であればあるほどすぐ飛びつく。でもその時に、「そういうふうに言ってくれるのは有り難いけれど、そういうあんたもわしの本当の姿を知ったら逃げるぞと言うて出れるものを貰っておきなさい」と。大石先生もそれを私どもによく聞かせて下さっていました。あるいは藤解（とうげ）先生のこういう言葉もよく大石先生から

聞かせていただきました。

「公衆の面前で蛙がトンビに生皮を剥がれるような仕打ちを受けても、黙って念仏しておれる心を貰っておきなさい。あんたにそれがあるんなら言いはせん。ないから言うんじゃ」

こういう言葉にも藤解先生のお慈悲を感じますよね。

## ■落ち込んだ所が分岐点

まあそういうお言葉が思い出されたわけです。それで手紙の最後にこう書きました。

私においては、今回のことは、高上がって自他のことをあれこれと云々し、本願の私を呼ぶ声を見失っていた私の上において、私を呼ぶ本願の微かな声にわずかなりとも立ち返らしめられた尊い経験でした。

お手紙に書いておられた「読んでも読めない、聞いても聞こえない自分」というところを読んだ時、ああこれこそ喘ぎつつ教えを聞いていこうとしておられる人の言葉だなと感じました。それと同時に、ここが大事な分岐点だと思いました。

ここに書いていますが、「読んでも読めない、聞いても聞こえない自分」、ここが非常に大事な所で、そこがやはり分岐点だと思うんです。「それじゃ駄目だ」と、こうなるのかね。普通は「こんな自分は駄目だ」となる。でもそこが分岐点だと思いますね。駄目なんじゃなくて、実はそれが一番大事なんだと。

「私は聞いた聞いた」と言ってるのは、全部上滑りで、そういうものは聞いたことに入らんのです。有頂天になっているだけです。「聞こえてくる」というのは、むしろ「読んでも読めない、聞いても聞こえない自分」という所に「聞こえてくる」のではないかと思います。Bさんが今まであれほど一生懸命に聞いてこられながら、感話で「ずーっと聞いてなかった」と、そう言われました。そこが「聞こえてくる」場所で、自分が「聞いた」というのは、上滑りのところで聞いて自己満足しているだけなんです。本当は何も聞いてなかったと、そういうふうに落ち込んでいく、そこに「聞こえてくる」。

私は自分自身についていつも感じるんですけど、平面のところで留まっていると思います。自分についても人についても、「あの人はこういう人や」「自分はこうだ」と、そういうふうに自分で評価したり、自分が見たその人のことを言っています。「自分はこういう人間なんだ」と自分で思ったり、人に言ったりしています。けれどもそれは自分が見た自分なんです。みな表面なんです。如来さんによって見られた自分というものは、自分でこうだと言ってるのとは全然違うんです。それは自分からは本当に届きません。

では聞こえて来るというのはどういう時かというと、「聞いても聞こえない自分」という所で行き詰った時に、始めて先生

の言葉とかがふと響いてくるということがあります。大石先生だけじゃないですよ。今まで出会ってきた方々の声がね、ふっとこう響いて来るということがあります。自分から聞こうと思ったら駄目ですね。

私どもにおいてわずかでも響いてくる手掛かりは、こういう落ち込むところですね。そこが分岐点で、これじゃ駄目だと言って、そうじゃない自分に成ろうとするのか。またそれで成れるのか。そうでなくて、その落ち込んだ所が大事なのです。その真っただ中で聞いていく、尋ねていく。そこに大石先生も三十八年間苦労されたわけですし、親鸞聖人もそうです。そういう所で聞こえてくるものを待つ。そういう姿勢で聞法していく。そういう分岐点なんです。「これでは駄目だ」と、そういう自分を改めて行こうとする方向に向かうのか、それともこのような姿を知らされた所にこそ、今までの自分が破られるきっかけがあるというふうに受け取るのか。普通は「これじゃ駄目だ」と思うんです。だから益々落ち込んでいく。そういうふうになればなるほど、他の立派な人が目につきますからね。それで益々追い込まれていきます。

## ■嫌悪、憎悪、敵意の爆発

それから今度は別の方のお手紙です。これは先に発行した「心光寺定例聞法会便り・第1号」に対してその方が礼状を下さり、その返信を私が書き、それに対してまたその方からお返事を頂いたんですね。その中の一部を読ませていただこうと思います。

この二月以来、私の生活はそれまでとは一変しました。義父（家内の父）が一つ屋根の下で暮らすようになったのです。初めは快く迎えました。しかしそんな殊勝な気持ちは程なく消えました。そして四ヶ月余りが過ぎた昨今は、その顔を見るのさえ辛くなっています。いやそんな生易しいものではありません。今では考えただけで、その存在自体が恨まれ、毎日が激しい闘いです。嫌悪と憎悪が敵意にまで変わりつつあります。

と言いましても、この気持ちは勿論本人には言えません。どうしても妻に辛く当ることになります。その結果とうとう妻は体調を崩し、もともと高かった血糖値が急上昇。もう妻に愚痴をぶつけることもできません。毎日が出口のない自分との闘いとなったのです。

そして半月ほど前のことです。その抑えに抑えてきた私の気持ちが大爆発を起こしたのです。義父に関わるほんの些細な私の言葉に、先ず妻が感情を爆発させました。妻には隠していたつもりの私の気持ちが、日常の言動に絶えず出ていたのです。妻も我慢の限界だったのでしょう。妻の激しい言葉を受けて、私も間髪を入れず激しい言葉を返します。隣家にも聞こえそうな罵声のぶつけ合いとなりまし

た。「これで妻との生活も終わりか」。そんなことさえ頭をよぎりました。

（平成二十四年七月五日付）

こういうことを正直に書いて下さったんですね。皆さん方の感話を聞かせて頂いても、やはり流れておるものは同じです。私も同じなんですね。皆さん方は今の手紙を聞かれてどう思われましたか。

私はこの方に返事を書かせていただきました。私は一読して、まず「尊い」と、こういうふうに思ったんですね。我慢していた感情が爆発して隣家にも聞こえるような罵声が飛び交う、そういう赤裸々な情景を包み隠しなく書いて下さっているのですが、尊いと思いますね。「手を合わせずにはおれません」と、これをまず最初に書きました。

次に書いたのは、この方は義父に対して出口のない嫌悪と憎悪と敵意に曝されているわけですが、これは道徳心でどうにかなるようなものではありません。そういう心をおこしちゃいけないということは、倫理道徳では教えます。だからこの方も最初は気持ちよく受け容れたんです。「どうぞどうぞ」と。我々はそういう倫理道徳心をみんな持っていてそれで生きています。けれども一方では、それが本当に吹っ飛んでしまうようなものも、この身の奥に持ってるわけですね。この方もそうだったんです。でついに嫌悪と憎悪と敵意に曝されたわけです。けれどもそれは決してこの方だけの個人的な出来事じゃないということです。それを次に書きました。今までこういう苦しみに無数の人たちが苦しんできたんです。今も苦しんでいます。沢山の人が。そしてこれからも苦しみ続けるんです。人類が続く限り、人間が生きてる限り、無始の昔からこういう問題に苦しみ続けていく。私もこういうことは具に経験があります。だからこの方だけの個人的な問題ではありません。だから尊いわけです。

## ■嫌悪、憎悪、敵意の出所は

それで「私はこの出来事の中からとても大事な二つの意味を汲み取らせていただきます」と書きました。

先ず一つは、義父に対する嫌悪と憎悪と敵意の感情の淵源はどこにあるのだろうかということです。淵源という字は、淵の源と書きますね。淵に満々と水が湛えられている。その水は底から湧いている。底から湧き出て、淵になって満々と水を湛えている。その淵の源泉ということです。この方の場合で言うと、義父に対する嫌悪、憎悪、敵意、これが淵です。溢れてどうにもならない。しかしその淵の源泉、淵源、出所は、義父ではないということです。自分自身なんです。義父は縁に過ぎない。だから義父がいなくなったら解決するかと言ったら、それは一時的には解決します。けれども淵源は自分自身にあるのですから、違う縁の中で必ず同じ問題は起こってきます。それは皆さん方も同じようなことはあると思います。義父が原因

のようにあるけれども、縁に過ぎない。淵源は自分自身の中にある。

どういう淵源かというと、自分自身に対する敵意と嫌悪と憎悪です。直接的には義父に対する敵意と嫌悪と憎悪として現れていますが、その淵源は、自分自身の中に、自己に対する敵意と嫌悪と憎悪があって、そこから起っているのです。私どもは世界とか人とかに対して敵意や憎しみを持ったりすることがありますけれども、それは元をただせば自分自身に対する憎しみとか敵意から来ているのです。つまりこれはあまり気付かれませんけれども、私どもの世界とか人に対する態度というのは、元をただせば自分が自分自身の生に対して深い所で懐いている感情、態度の表れだということですね。意識に表れませんけれど、深く見ればそうだと思うんですね。やはり自分自身が自分を受け容れてない。深いところで自分自身を憎んでいる。敵意を持っている。そういうものが意識に表れなくても、深いところにあって、目の前の人を縁にして表れてくる。これは私自身がそういうことを感じるわけです。私自身が自分自身を深いところで憎んでいる。そういうことの反映ですね。

この方が手紙に書いて下さった家庭内の出来事から「私は大事な意味を汲み取らせていただきます」と書いたわけですが、その大事な意味の一つは以上のようなことです。

## ■夫婦喧嘩の奥は深い

二つ目は、そういうようなことを通常聞きますと、じゃ自分自身を受け容れていないとか、自分自身に対する憎しみとか敵意とか、そういったものを改めていかなければならないと、こういうふうに思うと思うんですね。教えを聞いてですね、自分を受け容れていくようにしていこう、その為にも一層聞法していこうと、こういうふうに考えが向かうと思うんです。しかしそういうことを私は言いたかったわけじゃないんですよ。だからその方への手紙には、「このことは通常言われてるような倫理的、道徳的教訓のようなものとは次元の違うものです」と書きました。そのことをどう表現したらよいかなと思いまして、ある先生（西田真因先生）の著作を通じて知ったある資料を取り挙げて手紙に書きました。今日資料としてお配りしているものがそれです。

これは「吉田源之助家家訓」というもので、富山県に古文書として残っているそうです。江戸時代の天保年間に吉田源之助という人の家に家訓として伝わっていたものです。それを西田真因先生が法話の中で紹介して下さっていました。

富山県は真宗王国と言われる所で、昔から真宗の教えが盛んな所です。特に江戸時代は代々家を挙げて蓮如上人の教えに生きてこられた家庭が多い。それが「吉田源之助家家訓」として古文書に残されていたわけです。家訓は一番から七番ま

で箇条書きにして書かれていますが、その中の七番目に、

婦夫ノ中ニ申ス事出来候テ腹立候共扨々此心ニテ永ク大悲ノ御胸ヲ焦シ又モ大悲ノ御胸ノイタマシモノヲト早ク回心　（傍点は宮岳）

という家訓があります。これが家訓の一番最後に挙げられているものです。これを私は十年くらい前に知ったんですが、これが心に残っているんです。「此心にて」という所に傍点を付けたのは私です。「此心」とは腹立ちの心のことですね。「此心ニテ永ク大悲ノ御胸ヲ焦シ又モ大悲ノ御胸ノイタマシモノヲト早ク回心」とあります。夫婦の抜き差しならぬ諍いのただ中に於いて、どうにも持って行き場のない腹立ちに身を焼かれるという精神的危機、そういう危機は私もしょっちゅう経験するのですが、吉田源之助さんの一家はそういう危機の中で、蓮如上人の教えを必死にいただいてこられたことがわかります。そういう先人のご苦労の足跡を、この家訓の上に窺うことができます。

どういうふうに窺う事ができるかというと、私はその方への手紙に四つ程箇条書きにして書きました。

一、夫婦の諍いという出来事を縁にして、今この身の上にむらむらと起こった「此の心」。ところが「此の心」の奥を辿っていくとどこまで行くか分からん底無しの闇につながっていきます。

ここなんですよ。私どもが日常生活の中でよく経験する夫婦喧嘩は、単なる夫婦喧嘩と思うかも知れませんけれども、実はとんでもなく奥が深いということです。普通は大体そういうことを見過ごしていますし、あるいは道徳心によって、そういう心を起こしちゃいかんとか、そういうふうに対処していこうとします。しかし「此の心」の奥を辿ってゆくと、どこまで行くか分からない底無しの闇なんです。無始以来の闇です。道徳心などのとても手に負える代物ではないんです。それを親鸞聖人も

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。　（真宗大谷派『真宗聖典』二二五頁）

とおっしゃっておられます。「一切の群生海」ですよ。個人的なことじゃないんです。あらゆる生きとし生けるもの。それを海に譬えています。果てが無いし底がない。無数ということです。また時間的にも「無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで」と。もう始めがない過去からの遠い歴史を抱えている。ですからむらむらと起った「此の心」の中に、一切群生海の無始の過去からの業の歴史が全部詰っている。もう個人を突き抜けた深さと広がりを持っているんですね。道徳心なんかでどうにかなるようなもんじゃないんです。そんなものは木っ端微塵に吹き飛んでしまいます。

## ■迷いの深さが本願の深さ

続いて二番目にこう書いたんですね。

二、ところが、そのそのどす黒い闇の底知れない深さと果てしない広がりは、そのまま本願（法蔵菩薩）の深い心とぴったり重なっているものです。

つまり一切群生海の迷いの深さは、そのままその迷いを受け止める本願の深さと重なっているということです。

それで三番目にこう書きました。

三、したがって「此の心」こそは、本願（法蔵菩薩）の深い心へ至るための大事な回路です。その意味で「此の心」は、私にとって無くてはならない宝物の詰った宝庫だということができると思います。

だから「此の心」、むらむらと起る怒りの心や腹立ちの心ですが、それが枯渇すれば本願（法蔵菩薩）の深い心もまた枯れていくわけです。今月の掲示板に親鸞聖人の次の御和讃を書いています。

罪障功徳の体となる　こおりとみずのごとくにて
こおりおおきにみずおおし　さわりおおきに徳おおし

（真宗大谷派『真宗聖典』四九三頁）

氷が多いから水も多いわけで、氷が少なかったら水も少ないわけです。これを四番目に書きました。

そしてその後に次のように書いて、その方への手紙を結びました。

以上、「吉田源之助家家訓」の「此の心」について感じていることを縷々書いてきました。言いたかったのは、お父様に対する嫌悪と憎悪と敵意の感情は、元をただせば自身についての嫌悪と憎悪と敵意からきているわけですが、それを改めていくというより、そのことがとうてい手の届きようのない底深さを持っているということ、しかしながらその救いようのない闇の深さは、とりもなおさず本願（法蔵菩薩）の深さと重なるものであること、従って私においては自身の無底の闇の深さをどこまでも知らされていくことこそ何よりも大事だと感じているということでありました。　（二〇一二年七月九日付）

以上です。尻切れとんぼになりましたが、時間がまいりしたので、一応ここで終わらせていただきます。後は休憩後皆さん方から自由にお話を出して下さい。**【発題終り】**

## 【座談の部（抄）】

### ■老老介護の切羽詰まった現実

【D】先ほどのお手紙の方の義父との関係は、今の私の実母との関係とそっくり同じだなあと思いながら聞いていました。私は姉と交代で、遠くの実家に暮らしている高齢の母親を看てきましたが、姉が足を痛めて行けなくなり、今年になってからは殆ど私が看ています。一対一で居りますから、「ああ～」と思うくらい自分の嫌な面がどんどん出てくるんですね。自分の母親に対してどんどん酷（ひど）くなってきて、今は手を上げてこつんとやるのは当たり前みたいになってしまって、どんどんエスカレートするような気がするんです。

ただ、その方に対して文隆さんが書かれた返信についてですけど、それが自分の業だとかいうことは全然自分では分りませんし、気付きません。それをじっと自分で見ていったり、じっと考えていく力も私にはないと思います。

これ以上自分が嫌な思いをしないで済むには、母に施設に入ってもらうしかない。でも母に施設に入ってもらったら、私も年を取ってきたし、距離も遠く離れているので、多分もう母の所へは行かなくなるだろうと思うんですよ。母を看るということもなくなるでしょう。もう行く時は葬式の時以外はないかなと思うから、なるべく家に居て欲しい。でもこれ以上私がエスカレートして母に手を上げるようなことになったらも

うどうしようもないなあっていうふうに思うんです。
　そういう中でいくらああいうお話を聞いたとしても、私には今の私のことをずっと見ていくことがまずできないんです。どうしたらよいかとかじゃないんですけど…。今自分で話しながら、足を一歩一歩出すしかないかなーと、そう思いました。要するに何も考えずに、今日一日、今日一日と、それしかないかなーと。別にその、母と居るのが嫌だとかいうことじゃないけど、つい昨日まで出来ていたことが今日出来なかったら、ものすごく腹が立ってくる。もう理屈じゃないんです。
【宮岳】やっぱりそういうどうにもならない現実というのがあるでしょう。それが大事な場面であるということだけは、親鸞聖人の教えや大石先生の教えに出会って教えて下さるように思います。そのことだけを言いたかった。
　今目の前の事で一歩一歩進むしかないと言われました。これは本当に差し迫った人の言葉だと思います。Dさんの場合は、もう何年も何年もそうやって交代しながら遠くの実家まで帰られてお母さんを介護してきておられます。もしそういうことがなかったら、どうですかねえ。今そういうことが本当に困った事であると思うんですけど、そのことがもしなかったら知らなかった世界というものがあると思うんですよ。自分自身の本当にどうにもならない問題、今も現在進行形ですけども、そういう世界を知らずに、もうちょっと善い自分でおれたかも知れないと思うんですよ。しかし善い自分でいることが許されないような、本当に抜き差しならない所に立たされている。そういうことがあって、そういう自分と直面しているということがあると思うんです。
　そういう意味ではDさんのおっしゃったことは大事な提言なんですね。本当にDさんだけのことではなくて、沢山の人が今老老介護の状況に追い込まれています。この近所でも、八十歳を超えた方が認知症の奥さんを介護している。ご自身も脳梗塞の後遺症を持ちながら介護してるんですよ。息子さんはいるにはいるが、遠方に住んでいるので面倒をみない。本当に悲惨な状況です。そういうことで苦しんでいる人が本当に多いと思いますし、これから益々多くなると思いますね。
　でもそれがただマイナスだけじゃないということをね、教えて下さる。私自身そういうふうに思うんですよ。
【D】だからこのお手紙を書かれた人の気持ちがすごく共感できる。
【宮岳】ほんとにそうですね。よく書いて下さったと思うんですよ。普通このようなことは隠しておきたいと思いますよね。それを打ち明けて下さった。尊いですよ本当に。実はこういう出来事というのは、マイナスどころか本当は尊い。Dさんのお話を聞かせていただいても同じものを感じますね。
【E】大石先生の書信の中にもありますよね。どうしても優し

い心で接することが出来ないとか、声を荒らげてしまうとか、そういう時のことをお話しされている所があります。私どもがそういう状態の時には、やっぱり大石先生が書いておられることに耳を傾けることしか、方法論といったらおかしいけれど、ないんじゃないかなと思う。

私だって長男を月に一回か二回施設に迎えに行って又送って行く。それの繰り返しで、先生からいただいたお言葉、「T君（長男）に手が合わさったら、あなたはもう解決よ」とおっしゃって下さったお言葉がずーっと念頭にあるんですよ。先生の教えをずっと聞かせていただきながら長男と接している内に、先生が言われた意味が聞こえてきたんです。その時には、間違いなく手を合わされます。でも現実に家に連れて帰って来た時に、長男がおとなしかったらよいんですけど、こちらの意に沿わないような行動を取ったりした時は、やはりつい怒鳴りますよね。あるいはちょっと叩いたりとか声を荒らげてしまう。そういうふうになってしまう自分と、手を合わせる自分と、その二面性があるんですよね。その時にはっと気付くということが大事じゃないかと思うこともあります。

## ■自分の地獄を知る為に生れて来た

【宮岳】高柳先生が話しておられたんですが、老老介護で、九十歳を過ぎた母を七十歳過ぎた娘さんが介護している。で今言ったようなことがある。ついつい手が出る。世間でいうと教養のある立派な人ですよ。でその時に七十歳過ぎた娘さんが言った言葉が、「あなたは一度も私に、親らしい事をしてくれた事がない」という言葉だったそうです。象徴的でしょう。やはり親子というものは、本当に七十歳過ぎても、親を求める子供なんですね。満たされなかった親への怨みが残っている。だから倫理道徳心で「それじゃいけん」と、そういう問題じゃなくて、七十になっても九十になっても、私どもは本当の親を求める。だからそこに、親に対する怨みもあるんですよ。子供というものは、大体生まれたということが、親が生んだということで、自分に責任ないことですから、親に対して根源的に怨みを持っているといいます。ちょうど**阿闍世**(あじゃせ)[注1]がみんなから「**未生怨**(みしょうおん)[注2]」、つまり生まれる前からの怨みを抱いて生れて来

---

注1「**阿闍世**(あじゃせ)」…古代インドのマガダ国王ビンビサーラ（頻婆娑羅(びんばしゃら)）の王子。母は韋提希(いだいけ)。提婆達多(だいばだった)にそそのかされて父王を殺害し王位についたが、後に激しい後悔の念に苦しみ、大臣耆婆(ぎば)の勧めによって入滅前の釈尊に出会い入信した。実際にあった事件と言われており、王舎城の悲劇として、『観無量寿経』や『涅槃経』をはじめ、いくつかの経典に取り上げられている。

注2「**未生怨**」… 韋提希(いだいけ)は頻婆娑羅(びんばしゃらおう)王の正妻となった後、長い間懐妊しなかった。王は世継ぎを切望する余り、ある仙人が死ねば王子として生まれ変わるという占いを信じて、家臣に命じてその仙人を殺害した。仙人殺害後、占い通りに韋提希(いだいけ)は懐妊し、阿闍世(あじゃせ)が生れた。し

た者と呼ばれていたようなものです。それは我々も無意識のレベルでみんな持っている永遠の問題なのです。

だから本当に地獄を知るということなんですよ。法蔵菩薩はどこまでも地獄を舐め尽そうという覚悟をされた菩薩なんですよ。まあ家庭の地獄というものも、奥を辿っていけば本当に底が無いわけです。自分がいい人間でおれて、いい人間で一生を終える、そういう一生を送りたいと思うなら、はっきり言ってもう親鸞聖人の教えは聞かん方がいい。親鸞聖人の教えというのは、本当に自分自身の地獄を知らせてくれる。だから極端な言い方ですけれど、「人身受け難し」と言いますが、私たちは一体何の為に生まれて来たのか。地獄を知る為なんです。そういう自己発見をする為なんですね。自分はいい人間と思っているけれど、どれだけの地獄を、底の無い地獄を持っているか。そのことを発見する為に生まれてきたと言ってもいい。これは中々こういう場でしか私は言わないんですが、普通こんなことを言ったら親鸞聖人の教えを聞くのを止めたと皆言うので言えないんですが、本当は私はそう思っているんですよ。自分の地獄なのにその地獄を私は知らない。その私に地獄を教えて下さるのです。

先ほどちょっと触れた『歎異抄』第九章というのは、そういうことを親鸞聖人はおっしゃっているんですよ。念仏を喜べないということと求める心が起らないということは、唯円にとっては危機的な経験なんですね。それでお叱りを受けることを覚悟して、思い切って親鸞聖人に「これを一体どう考えたらよいのでしょうか」と尋ねた。それに対して親鸞聖人は「よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり」とおっしゃった。これは「よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ地獄は一定とおもいたまうべきなり」というふうに、「往生」の語をそのまま、まず「地獄」の語に置き換えて読むとよく頷けるんですね。

『歎異抄』第二章では親鸞聖人は「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定、すみかぞかし」とおっしゃっていますね。そう言える心は地獄でしょうか。そうではないですね。地獄を逃げずに一つになっていく心ですから、それこそが浄土の心と言わなければならないでしょう。ですから「地獄は一定」ということと「往生は一定」ということは一つなんです。「往生は一定」というと、何か問題が解決して救われたというように読んでしまうんですが、そうではないんです。解決がつかないような現実を、投げ出さずに一つになって歩み続けていく。それが「往生一定」です。つまり「地獄一定の

---

かしその経緯を知る国民は、阿闍世のことを密かに、「未生怨」、すなわち出生以前からの怨みを抱く者と呼んだ。

身」の発見、それが「往生一定」なんです。

さっき本願の声というものは、有頂天の時には絶対聞こえてこないと申し上げました。本願のわが身を呼ぶ声は、地獄の底で、それも微かに聞こえてくる。Dさんが中々聞こえないと言われましたが、本当に私もそうなんです。いつも何と言うか、自分についても人についても上滑りをしてるんです。上滑りをして、人の評価をしたり、ああだこうだと言って、それで一生を送ってしまうんです。表面だけで。上滑りして、生きたことにならないんです。自分の地獄を本当に知ったということが、生きたことになるんであってね。自分の地獄を知って、そこで微かに聞こえる本願の声に出会う。と言うか、自分の地獄を知らされたということが、そのことが本願の声なんです。

ともかくそういうことがなかったら、何の為の人生かということになります。もう酔生夢死ですよ。ああいう事があった、こういう事もあったといってね、百年生きても一緒ですよ。だから本当にDさんのそういう経験というのは尊い。本当に自分がどれだけの地獄を持っているかということを、お母さんと格闘しながら介護することによって知らされてくる。そういうことがなかったら、知らんですんだわけですけれども、いやでもそういうものを見ざるを得んような状況に立たされているわけです。

そういう意味で、そこそが自己発見の場です。自分の地獄を少しでも知れたら、それが法蔵菩薩の声が聞こえて来たということですし、その為にこそ生まれて来たと言ってもよいと思うんですね。それは喜びですよ。自分の地獄が微かでも知れたら喜びです。これはもう理屈ではないですね。

## ■相手の合掌によって自分が照らされた

【坊守】（泣きながら）何と言おうか、悲しいんだと思うんです、Dさんは。私は思い出したんだけど、実はお爺ちゃん（義父）が入院した日に、私も手を上げたんです。とにかく文隆さんも富山の方に行っていて家にはしばらく居なくて、お爺ちゃんは少し不安だったんです。それで朝部屋に行ってみたら、何をしてるのかよく分からないんです。じっと様子をみたらパンツを換えたようだけどパンツが換わってない。吸入器をしてるよう見えるけども吸入しているわけでもない。何かいつもと違う。「お爺ちゃん何してたんか」と言ったんだけど、本人もこんがらがっていたと思うんですね、今思うと。答えが出ない。それを責めた。「何をしてるんね」と。そしたらそれに答えなかった。私はつい「何をしようとしてるんね」と叩いたんですよ。これは本当に文隆さんには言ってない。それを今思い出した。本当にね、真剣にしてるとそういうことになる。それは不真面目だからそうなるんじゃない。一生懸命にやっていることがそうなってしまう。疲れも出て。

そしたらお爺ちゃんの力が抜けた。頑張っていた力が抜け

て、それで食べなくなった。ベッドに寝たままになって、今までのように居間のテーブルまで来れなくなった。それで「部屋で食べようか。ここまで持って来るよ」と言って、食事を部屋へ持って行った。でも食べれなかった。起き上がれずに喉に詰まったらお終いなんですね。ちょっと飲み込みがおかしくなっていたから。それに肺に病気があって、肺に痰を詰まらせたら死んでしまうんですね。それで家で看ようと覚悟してはおったんだけど、とうとう救急車を呼んで入院になった。

入院してから、お爺ちゃんは私が来るのを待つようになった。そうなったのは、ある時から私がお爺ちゃんに頭が下がるようになってからです。何も食べれず静かにしているお爺ちゃんに、何か凄いなあと感じて、「お爺ちゃん立派や。仏間に掛かっている『安樂集』の文―『前に生まれん者は後を導き、後に生れん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんがためのゆえなり』（『真宗聖典』四〇一頁）―を思い出すよ。その通りの姿で立派ですよ」と言った。その一言があって、次の日からお爺ちゃんは私が行くのを待つようになったんです。

私はその時、何と今の今まで相手のことを貶めておったのかと思いました。大石先生がKさんを殴られた時、「拝む手が殴る手になった」とおっしゃった。「拝む気持ちで預かりますと言ったのに、私は殴りました」と言われました。そのKさんによって自分の姿に気づかれた時の様子を、先生はいつも黒板に線画で書かれていました。その絵は先生が五体投地して地面に体を投げ出して、Kさんを頭の上に持ち上げるように押し戴いて合掌しておられる絵だった。その絵が思い出されました。

私はその時始めて、今の今までお爺ちゃんを貶めて来た自分に気付かされました。「お爺ちゃんという人は。お爺ちゃんという人は」と言って貶めてきた自分の心が、その時始めて照らし出されました。私がこう（合掌）したんじゃないんです。お爺ちゃんの方がこう（合掌）したんです。それで始めて私もこう（合掌）なった。おそらく私は叩く心しかないんです。向こうの方が合掌している。私もお爺ちゃんの娘としてここに来させて貰ったんで、そういうふうにいつも私のことを上げて下さっていたのを分らんで、貶めることしかできない自分だということを教えていただきました。それがお爺ちゃんのお念仏の一生だった。静かに亡くなっていく姿も見せていただきました。先生のお念仏を聞かせていただいて、今度また身近な人がそれに続いてお念仏の姿を見せて下さったので、とても有り難たかったと思います。

だから私はDさんのお話を聞いて、深く共感しました。本当にご苦労様と、そう思いました。

## ■人と人はどこで出会えるか

【宮岳】　今坊守が言ったこと、私もやはり父親に対してあるんです。亡くなって本当に思うことが多いです。阿闍世（あじゃせ）は父親を殺してしまったんですね。父親を殺して父親に出会っているようなところがあるんです。これは本当にそういうふうにして出会っていくということはあります。夫婦でも離婚するということもありますし、離婚するという痛手を通して出会うということもあるんですね。何かそういう意味では人間というものは深いなと思うんですね。母親の介護に一生懸命になる余りに、つい殴ったりしてしまう。そのような痛みや葛藤を通して、自分に出会う。自分に出会うということが、目の前の人に出会っていくということです。

先月の心光寺の掲示板は、大石先生から聞かせていただいた藤解（とうげ）先生のお言葉で、「自分に出遇えなかったら　夫婦もぴったりしませんよ　親子もぴったりしませんよ」というものでした。それは夫婦や親子だけでなくて、あらゆる人について言えるんですね。直接出会おうとした場合は必ず上滑りになってしまいますね。自分に出会う。本願に出会う。本願に出会うということは、自分に出会うということと一緒なんです。

キリスト教でも同じようなことを言っているんですよ。人と人とが結びつくというのは、直接結びつくことはできない。双方が自分を高めて直接結びつこうと努力するのは倫理道徳心ですが、キリスト教も深い教えだから、そこはもう見極めていますね。直接出会おうとしても出会うことはできない。神様と出会うことを通してお互いが出会うことができるんだというような言葉がキリスト教の言葉にもあったと思います。そういうことが確かにある。親子も直接出会うことはできない。逆に争いがあったり手を下したり、夫婦でも諍（いさか）いがあったり離婚したりすることもあるけれども、それは本願に出会い、自己に出会うことを通して相手に出会っていくための悪戦苦闘なんだと。今生（こんじょう）で出会えなくても―今生（こんじょう）という意味は自分の時間世界という意味ですが―本願の時間世界において出会える世界が確かにあるということです。もし仏法がなかったら、そういう時は永遠に来ないんです。

【D】坊守さんの義父との関係、私は実母との関係、同じだなあと思って聞いていました。最初こつんとやってしまった時は二、三日母の顔をまともに見れなかったのが、すぐこつんとやってしまうような感じになってきて、どんどんエスカレートするような気がしたんです。もうこれ以上エスカレートするようなことがあったら、もうどうしようもないと思うんです。いくら話を聞いたとしても、それをずっと見ていくことができないっていうのが、私の今の問題かなと思いました。どうしたらいいかとかいうことではなくて。

【宮岳】本願の教えというものは、そういうことをマイナスと見ないんです。人間の業の深さというものを見て、その地獄を

本当に知らされていくということ、それが本願に出遇うことだと。そのことにおいて、あらゆる人と出会う。人と人が出会うことができるとすればそれしかない。自分の地獄を知らせていただいて、その地獄と離れない本願。その本願において一切の人と出会う。人と出会う道はそれしかないということを思います。

【F】私も最近娘との仲がおかしくなっています。娘夫婦は隣に家を建てていて、一歳の男の子がいます。以前は毎日のように孫を連れて家に来ていたのに、あることがきっかけでぱたっと来ないようになりました。ある時私が孫をあやそうとしたら、「Rちゃん、おいで」と言って引き離してしまいました。そういう状態が三カ月ほど続いたある日のこと、駐車場の所で娘と言い争いになりました。私がどなったところ娘が言い返したので、私は娘を二、三発叩きました。その頃娘は妊娠二カ月位でしたので、娘は「私は妊婦なのよ」と強く抗議しました。私は「いろいろ賢しいことを言うな」と言い返しました。

私は娘を大らかに育てて手を出したことはほとんどないのに、最近になってそういうことがありました。それから娘はいよいよ遠ざかるようになりました。仏法を聞いていて、こういうことになって、情けないと思います。隣に家を建てさせたのが間違いだった。元の畑に戻して欲しいと言おうかとか、妄想がどんどん出てきますね。人間というのは一回妄想が湧くと変な方向に行って困りますね。

## ■破綻、葛藤がそのまま呼び声

【坊守】文隆さん、この間大分組夏期講習会で講師の高柳先生が、相手を尊敬できるようになると、そういうことをおっしゃったことがある。

【宮岳】どういう所でおっしゃったかよく記憶していないけど、おそらく尊敬できるっていうのは、立派だから尊敬できるとかそういう意味ではなくて、どんな人の業も尊敬せざるを得ないものだということではないかと思う。あの人の業は尊敬できるがこの人の業は尊敬できない、ということではないと。そういう個人的なことではない。高柳先生のお話を聞いていて思うのですが、どの人の業も尊敬すべきもの、尊いものなんですね。尊いと。

娘さんを叩いたというのは、今日Fさんが初めてこの場で言われたことですね。高柳先生もお母さんとの葛藤が随分あって、そういう痛みを潜ってお話をされます。だからこそ先生のお話は私に響くんですね。親子が中々出会えないということですね。それは私も本当に思いますね。

私の闇の時代―闇の時代というのは、私は信心を得ようと志して、教師の反対を押し切って大谷大学に行きました。ところが大学では結局ものにならずに卒業して、市役所に就職しました。そこで世の現実に接した時に、全く自分自身を見失う

時期が続きました。その時期のことです。教えもどこかに消えていって、大谷大学に行ったということ自体を後悔する、そういう人間になっていきました。そういう時期がちょうど子育ての時期と重なったわけです。自分が一番闇の時代にいる時が子育ての時期でした。だから三人の子供に対しては本当に申しわけなかったと思います。でもまたそういうことがあったから、大石先生に出会えたということもあるわけですが。

この間大雨が降りました。私はもの凄い雨の中、合羽を着て増水した川の水を見に行ったんです。恐ろしかったです。息をのむ思いでした。荒れ狂う濁流の恐ろしさをまざまざと見せられました。その濁流を橋の上から見下ろしていました。その時私はふと思ったんです。ああいう濁流の中に幼い子供を突き落すのと同じことを私は三人の子供にしたんだと思いましたね。

私は高柳先生にも話したんですが、子供から殺されても仕方がないと思っています。だけども子供の方が偉かったわけです。子供は三人それぞれ自分の道を見つけて自立の道を歩んで行っているんです。もう私の限界をとっくに見通して、黙ってその先へ進んで、世間の枠には全くはまらず、独自な道をそれぞれ歩み出しています。

私はそういう自分の痛い過去を振り返りつつ思うのですが、目の前の人、奥さんや子供や父親について、また自分についても、本当に表面しか撫でていない。子供の心が分っていると思っているとしたら、それこそ大間違いだろうと思うんです。分っていると思っているとしたら、それこそが一番分っていない。一番子供の声が聞こえていない。だから自分は子供の声を聞けないということを知るしかない。その時に向こうが発する声をキャッチするアンテナが少しだけ与えられる。自分の方から聞くということはできない。

親鸞聖人のご和讃に

光明てらしてたえざれば　不断光仏（ふだんこうぶつ）となづけたり
聞光力（もんこうりき）のゆえなれば　心不断（しんふだん）にて往生す

（真宗大谷派『真宗聖典』四七九頁）

というご和讃があります。ここに「聞光力（もんこうりき）」という不思議な言葉があります。光は見るものであって聞くものではないと思うでしょう。なかなか意味としてはわからない。光を聞くとは一体どういうことなんだろうかなと。

これについて高柳先生がご自身の経験から話して下さっています。光は見るものだと思っていますが、実は見るということが一番問題なのだと。あの人のことも、この人のことも、世の中のことも、自分のことも、「こうだ」と見る。見ている自分が一番偉い。これが一番大きな落とし穴なんだと。そのことを本当に知らされる。光は見るものだと思っている、そのことが破られる。「自分は本当に何も見えていなかった」という時

に、始めて光が「聞こえてくる」。それも微(かす)かに。自分が光を見ている内は絶対に光は聞こえてこないと。子供の声も、自分は子供のことがわかっていると思っていると、子供の声は絶対に聞こえない。そのことを深く教えられました。

三人の子供たちはあまり自分のことを話しません。しかし今は私は子供の心が何も見えていないということだけを感じて、言わないけれども子供たちが発している声、体で発している声が微(かす)かにでも聞こえてくるのを待つっていうか、何かそんな感じなんですよ。ですからある意味では、どういうふうになっても受け容れていこうということだけは、今思っているんですね。

【E】人間っていうのは、自分の都合だけでしかできませんよね。家族だったら特にそうです。

【宮岳】そうですね。家族だからこそ見えない。第三者であれば見えることでも、身内であればあるほど、こちらの願いとか、こうしてほしいという自分なりの計画があるものだから、余計に見えない。

Gさんも、お父さんとの問題をよく話されますね。お父さんは、わが子であるからこそ叱るんですね。

【G】「何やっているんだ」と言われます。

【宮岳】我が子だからこそそうなる。他人だったら、もうちょっと広く受け容れられるんですけどね。それが親子の葛藤ですね。

【F】私がいろいろ手続きをして隣の畑に娘夫婦の家が建ちました。それが済んでしまうと、私は用事がないみたいに思われているのではなかろうかと思ったりする。まあ私にそれだけの魅力がないからだとは思うのですが。

【宮岳】私の場合からもつくづく思うんですが、実はそういうことが出会うチャンスだと思うんですよ、娘さんと本当の意味でね。親鸞聖人の場合は、不審、疑問、それがとても大事なものとして受け止められています。勅命という言葉があるでしょう。

【F】ああ勅命ね。如来の呼び声でしょう。

【宮岳】ええ、「本願招喚の勅命」ですね。勅命だから無条件の命令なんですね。この勅命というのは、そういう親子の葛藤とか、極端な例では、阿闍世(あじゃせ)はお父さんを殺してしまったわけですけれど、実はそういう業の苦しみが勅命なんですね。曽我先生がそう言っておられるわけですが、それを本当に感じますね。何かうまく行くことじゃないんですよ。また、うまく行かせようと思っても、人生は中々そうは問屋が卸さない。破綻(はたん)することもある。でも破綻(はたん)することが駄目なんじゃないんですね。業の中で破綻していく、それが実は勅命なんですね。

## ■地獄の真っただ中が呼び声の真っただ中

これは中々表現できないんですけど、本願の呼び声って、勅

命って、どこから聞こえてくるのか、ということがあると思うんです。そういうふうに本願の呼び声とか勅命という言葉を聞くと、どこかに本願というものがあって、自分を呼んでいるように思います。けれどもこれは私が感じておることなんですけども、そういう呼び声はどこか外にあるわけではないんです。そういう親子の葛藤なら親子の葛藤、そういう所にある。

Dさんがお母さんの介護をする中で、抜き差しのならないもの凄い葛藤の中に今おられるわけです。目の前のことしか考えられないというのは、それだけ切羽詰っているからです。それが呼び声の出所なんです。それが本願の出所なのであって、何かそういうものと別な所から「お前苦しんでいるからわしは呼んでいるぞ」と、そういう話ではない。そういうものは昔の説教のように作った話で、一時的な感情の陶酔はあっても、いつか消えてしまいます。残ったものはそういう葛藤しかない。地獄しかない。南無阿弥陀仏の出所は、その葛藤や地獄なんですわ。これだけは、私は説明はできんけど、感じます。直観のようなものです。呼び声、勅命といっても、そこ以外のどこにもない。残ったものはそういう地獄しかない。ところがその地獄がそのまま呼び声なのです。地獄の真っただ中が、そのまま呼び声の真っただ中です。

だから本願招喚というのは、そういう不審―『歎異抄』第九章で言えば、唯円が突き当たったような、念仏称えても喜べないし、求める心も起らないという不審ですが―親鸞聖人は、そういう不審から離れられない身であるということによって、地獄一定の身が知らされ、いよいよ往生は一定という確信が生まれると唯円に語っておられます。ということは、この不審こそが本願招喚の勅命なんですね。

【H】私の母は、子供の世話にはならないと常々言っていましたが、その内に施設に入って、認知症が出て、家内の世話に相当なって、やがて家内を「お母さん」と呼ぶようになりました。今はもう口がきけなくなって、もう子供に帰りました。今そういう状況の中で、母は別に済まないというふうにも感じていないようです。不合理だとは思うけども、認めざるを得ない。怨むこともできません。

【宮岳】勅命です。（一同笑）

それではこれで終わります。時間をだいぶ超過してしまいまして申しわけありませんでした。

**【座談終り】**

※以上は二〇一二年七月二十五日に実施した「心光寺定例聞法会」の記録を加筆訂正したものです。記録作成して下さいました安藤康彦様に深くご感謝申し上げます。尚、発言者の表記はイニシャルではありません。